



Title	マルセル・プルーストの地理的エクリチュール：『失われた時を求めて』の「土地の名」の挿話をめぐって
Author(s)	川本, 真也
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58543
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	川 本 真 也
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	第 24799 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	マルセル・ブルーストの地理的エクリチュールー『失われた時を求めて』の「土地の名」の挿話をめぐって—
論 文 審 査 委 員 (主査)	教 授 和田 章男
(副査)	教 授 服部 典之 言語文化研究科教授 金崎 春幸
	准教授 山上 浩嗣

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』の「土地の名」の挿話を対象として、「名の夢想」を喚起するノルマンディ地方とブルターニュ地方の町のイメージがいかに形成されたか、その生成過程を明らかにすることを目的としている。草稿資料に基づく生成研究に「地理的批評」の観点を導入し、物語上の地理と現実の地理との関係、土地のイメージ形成に関与する他の作家の作品や旅行ガイドブックとの間テクスト的関連を探求している。序論、6つの章、および結論から構成され、A4判334頁、四百字詰原稿用紙に換算して約680枚の論文である。なお、20世紀初頭のフランス地図、本論の考察に合わせた手書きによる地図4点、および図版3点が付けられている。

第一章では、「土地の名」の挿話の構成、成立過程、名のテーマの重要性について概観するとともに、草稿段階において夢想されるのみでなく、主人公が実際に訪れる町として機能していたバイユー、ポン=タヴェン、カンペルレという町々が、バルベックという架空の町に役割を移す過程をたどりつつ、『サント=ブルーに反論する』という仮題を持っていた初期の草稿に萌芽的に見られる名の夢想のテーマの源泉を明らかにする。第二章ではさらに未完小説『ジャン・サントウイユ』にまで遡り、「土地の名」の物語の起源を探る。書簡に基づき、知人でもあった女流詩人アンナ・ド・ノアイユの詩および小説との類似を検証するとともに、その類似のゆえに作家自身が焼却したと語るブルターニュ地方についての原稿が、『ジャン・サントウイユ』時代に作成された可能性を検討しながらも、1908年に書かれたと推測される現存しない「75枚の原稿」の中に含まれていたらうと推論する。

第三章は実人生におけるブルーストのブルターニュ旅行を考察対象とする。書簡および当時の交通事情を丹念に調査し、1895年のブルターニュ旅行においてどの町を訪れたかを検証する。その結果、小説で夢想の町として採り上げられることになるポン=タヴェンおよびカンペルレに作家が訪れていないと結論づける。第四章では、ノルマンディとブルターニュの町々が小説において果たす役割を考察し、架空の町バルベックに付与された嵐の海とペルシャ風の教会の二重のイメージの成立過程をたどるとともに、1906年頃からブルーストのブルターニュに対する嗜好に変化が見られることを指摘し、海辺の町へのあこがれから昔の風情を残す内陸部の町への興味へと変わっていることを明らかにする。

第五章は特に間テクスト的影響関係をテーマとしている。フローベールのブルターニュ旅行記『野を越え、磯を越えて』、およびブルーストもよく利用していたジョアンヌ・ガイドとの関係を論じる。第六章では、ルグランダンという作中人物が語る二重性を付与されたバルベック像、およびバルベックまでの行程、およびその地理的位置の生成過程を、綿密な草稿資料の分析によって明らかにしている。

架空の町バルベックに二つの地方のイメージを付与しようと腐心しつつも、地理的現実性を十分考慮していることから、ブルーストの地理的エクリチュールは夢想と現実の交差から編み出されたと結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文は、先行研究を十分に検討した上で、ブルーストに関しては、草稿、清書原稿、タイプ原稿、書簡、未完小説『ジャン・サントウイユ』など現存するすべての資料を網羅的かつ厳密に調査するとともに、当時の鉄道に関する文献、地誌、旅行ガイド、またアンナ・ド・ノワイユ、シャルル・ペギー、フローベール、アナトール・フランスの作品など、あらゆる関連資料の検討を踏まえて、ブルーストの小説に見られる土地イメージの生成過程を明らかにしている。

当時の交通事情の調査および作家の書簡の分析から、「名の夢想」の町として選ばれたノルマンディ地方とブルターニュ地方の10の町のうち、バイユー以外の町にはブルーストは実際に訪れたことがないと推定した意味は小さくない。小説中の夢想の町は作家自身が文献、旅行ガイド、絵や写真等に基づいてそれらの町を「夢想」していたと考えられ、間テクスト

的観点から作家が読んだ可能性の高い文献資料を調査する意味が生れることになる。アンナ・ド・ノワイユの詩の中でもとりわけ詩篇「旅」における町の表現の仕方との類似性、アナトール・フランスの『ピエール・ノジエール』に描かれるブルターニュ風景との関係性の指摘は興味深い。また、ブルーストも利用していた旅行ガイドブック「ジョアンヌ・ガイド」のノルマンディ地方およびブルターニュ地方編について、19世紀末から20世紀初頭にかけて刊行された複数の版を調査し、ガイドブックに紹介される町の地理的特徴や風俗と、小説の中で夢想される土地のイメージとの共通性を明らかにしている。このことから地理的イメージ形成において現実性が十分配慮されていたとの論は説得的である。さらに、1906年頃からブルターニュ地方に関して、嵐の海のイメージから内陸の古びた町に対するあこがれへと、ブルーストの嗜好が変化したことを明らかにした点も評価できる。ただ、テーマが限定されているため、論に広がりが欠けることは否めず、また生成過程を論じながら、源泉をたどるべく年代を遡るという論の進め方が論述を冗長にしている箇所もあるが、文献の丹念な分析に基づく推理力は極めて優れており、読み手に探索の妙味を味わわせてくれる。慎重かつ禁欲的でありながらも、土地の名のイメージ形成という問題をあらゆる角度から掘り下げる意義は高い。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。